

幼稚園教諭養成課程における 「専門的知識・技術」に関する一考察

—美術表現活動・音楽表現活動に関する学生の意識調査を中心として—

辻 真樹・渡辺 理香

はじめに

教育職員免許法施行規則の改正により新たに示された教職課程カリキュラムにて、「教科に関する科目」が「領域に関する専門的事項」へと置き換えられた。

その改正にあたり、本学の従前の教授内容を新カリキュラム内にどのように位置付け、どのような学修内容を教授すべきかについて検討した結果、「教科に関する科目」を「大学が独自に設定する科目」として新設することとなった¹⁾。

本稿は、著者らが新設科目を担当するにあたり、当該科目に求められている教授内容を設定することを目的とし、考察を行うものである。

第1章では、科目新設の経緯及び新設科目で教授すべき内容について令和2年度に行った考察の確認を行う。第2章では美術及び音楽表現科目のアンケート結果を比較することでそれぞれの科目の特徴を分析し、第3章にてその分析を基に「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」(以下「平成27答申」という。)にて求められている「大学の創意工夫により質の高い教職課程を編成する」²⁾ことを目標に、教育効果の高い本学教職課程の科目内容の構想を行う。

I 科目新設の経緯と新設科目の教授内容

はじめに述べたように、「教科に関する科目」で教授していた内容の今後の位置付けを探るため、教育職員免許法施行規則改正の背景とその内容を考察した結果、本学新カリキュラム編成の課題として「教科に関する科目」で行われていた「幼小連携を意識した内容」を引き続き織り込めるカリキュラムの構築が挙げられた。そして、学科長らとの検討の結果、「文部科学省初等中等教育局長通知」留意事項等の(3)³⁾において述べられているように、「大学が独自に設定する科目」に「教科に関する科目」を「幼小連携を意識した内容の科目」として設置することが現状の教育効果を維持するうえで最適であると判断された。

それを受け、美術表現科目に求められる内容について探るため、『美術工芸 I』履修者へのアンケート結果等から考察を行った結果、次のことが判明した。

- ◆履修者の多くは美術表現に関する専門的知識・技術(技能)が身に付いていると感じている。
- ◆専門的知識・技術(技能)が身に付いていても、それを子ども達へ指導することや自らの美的感性に不安を感じている者も少数ながら存在する。
- ◆幼小連携に関する意識は多くの者が持っていない。

よって、幼小連携に関する意識は持っていないものの、履修者の多くは美術表現活動を子どもに指導することについては自信を持っていることから、平

令和3年12月6日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)5500 FAX 0877(49)5252
Email tsuji@kjc.ac.jp

成27答申で述べられている「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」⁴⁾は達成できていると考えられた。

以上のことから、新設科目に求められる教授内容は、現行科目で行っている専門的知識・技術(技能)を身に付けることに加え、幼稚園の活動が小学校にどうつながっていくのかを理解することであり、さらには他の科目と連携することで指導方法に関する不安を薄めていくことも必要であるとの結論に至った。

また、学生が将来どのような知識・技術(技能)が必要と考えているかを把握することは、より充実したカリキュラムを構築していくうえで有益であり、他の科目についても同様の調査を行い、比較分析することを今後の課題とした。

以上が令和2年度に行った考察の概要であるが、本稿ではその際に科目の開講時期から行えなかった『音楽』履修者への調査結果と『美術工芸I』履修者への調査結果を比較分析し、新設科目についての構想をより深めていきたい。

II 美術表現科目及び音楽表現科目に対する学生の意識の違い

II-1. 美術表現科目及び音楽表現科目のアンケート結果の比較

前章で述べたとおり、本学教職課程においては現行の「教科に関する科目」を「大学が独自に設定する科目」として設置することとなったが、その教授内容としてはどのようなものが求められているのであろうか。

平成27答申では教員養成の課題の一つとして「教員としての職能成長が教職生活全体を通じて行われるものであることを踏まえ、養成段階は、『教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修』を行う段階であることを改めて認識することが重要である。」ことが挙げられている。この「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」とはどのようなものであるのか、令和2年度に美術表現科目に対する考察を行ったが、本章では新たに行った美術表現科目と音楽表現科目とのアンケート結果を比較し、それぞれの科目に対する学生の意識の違い

について探ってみたい。

II-2. アンケート結果の分析

II-2-1. アンケートについて

本アンケートの概要は次のとおりである。

◆令和3年度『美術工芸I』履修者(子ども学科第I部1年生56名, 子ども学科第III部1年生29名, 子ども学科第III部再履修者1名の計86名)

◆令和3年度『音楽』履修者(子ども学科第I部1年生56名, 子ども学科第III部1年生29名の計85名)

◆実施時期は共に授業初回(令和3年4月)

アンケートの質問内容は「本学入学までに受けた授業について」及び「保育者としての意識に関して」の2項目に大きく分けられる(アンケートの質問内容は資料参照)。なお紙幅の都合上、本稿ではその結果の一部についてのみ掲載する。

II-2-2. アンケート結果の比較

①「良い思い出」の内容について、美術と音楽の授業との比較

美術と音楽の授業それぞれの「良い思い出」とはどういった内容であったのかを比較した。なお、質問は自由記述式の回答としたため、回答の振り分けはできるだけ客観的に行ったものの多少の誤差は発生していると思われる。本質問は今年度から追加したものであり、次年度の調査においては客観性・再現性を保つため、今回多くみられた回答を整理し選択式の質問としたい。

表II-1に示すとおり、美術の授業に良い思い出があった学生の内、その内容として最も多かったのは「授業が楽しかった」であり、「周囲から肯定された」「連帯感を感じた」と続くが、音楽の授業では「連帯感を感じた」が最多であり、ほぼ同数で「授業が楽しかった」と「周囲から肯定された」と続いた。また、「想像力を活かせた」といった回答は美術で1名、音楽では0名となったが、この「想像力」については次の比較②でより大きな違いが見られることとなる。

なお、「嫌な思い出」を持っている学生数は少なかったため、ここでは比較は行わないが、両科目と

表Ⅱ-1 「良い思い出」の内容について、美術と音楽の授業との比較

	良い思い出があった場合、良い思い出になった理由 (なぜそれが良い思い出になったのか?) (複数回答含む。%の分母は「良い思い出がある学生」 の人数)	
	美術	音楽
授業が楽しかった	19 (31.1%)	11 (16.4%)
想像力(創造力、発想力等を含む)を活かした	1 (1.6%)	0 (0.0%)
周囲から肯定された	12 (19.7%)	10 (14.9%)
連帯感を感じた	8 (13.1%)	19 (28.4%)
その他	25 (41.0%)	33 (49.3%)

表Ⅱ-2 将来、子どもに保育を通して感じさせたい事について、美術表現活動と音楽表現活動との比較

	将来、子どもに保育を通して感じさせたい事(複数回答含む)	
	美術表現活動	音楽表現活動
楽しませたい	40 (46.5%)	62 (72.9%)
想像力(創造力、発想力等を含む)を育みたい	8 (9.3%)	1 (1.2%)
自己肯定感を感じさせたい	0 (0.0%)	0 (0.0%)
連帯感を感じさせたい	5 (5.8%)	18 (21.2%)
その他	35 (40.7%)	14 (16.5%)

もその内容は主に「自分の感性を否定された」「上手にできなかった」等が大半であった。

②将来、子どもに保育を通して感じさせたい事について、美術表現活動と音楽表現活動との比較

表Ⅱ-2に示すとおり、美術表現活動では「楽しませたい」が最多であり、続いて「想像力を育みたい」となり、「連帯感を感じさせたい」は5名、「自己肯定感を感じさせたい」は0名であった。音楽表現活動でも「楽しませたい」が最多であったが、「連帯感を感じさせたい」が続き、「想像力を育みたい」

は1名、「自己肯定感を感じさせたい」は0名であった。

比較①と②から、音楽表現活動に対しては入学当初から7割強の学生は楽しませるべきものと考え、さらに2割強の学生は連帯感を育む必要を感じていることが分かった。この連帯感については音楽表現活動における「良い思い出」のなかで「連帯感を感じた」が最多であることから、自分自身の経験からそう感じたことが推測される。美術表現活動においては、楽しませるべきものと考えている学生は5割弱であり、これまでの授業の内容があまり楽しめる

ものではなかった可能性もある。また、1割弱ではあるが創造力を育む必要を感じており、これについてもこれまで自身が経験した美術の授業の中で創造力が求められたことが推測される。

このように、美術と音楽は同じ表現科目ではあるが、学生はこれまでの経験からそれぞれについて次のような違った意識を持っていると考えられる。

- 美術表現科目について
 - ◆創造性や独創性などのオリジナリティを求められる。
 - ◆周囲から肯定された経験は個人の作品に対してのものであり、共同制作に対する意識は薄い。
- 音楽表現科目について
 - ◆連帯感や団結力などの協調性を求められる。
 - ◆達成感は集団での表現活動に対してのものであり、個人での表現活動に対する意識は薄い。

③将来、保育者として子どもたちに指導するため、自分自身にとって学ぶ必要があると思う事について、美術表現活動と音楽表現活動との比較
表Ⅱ-3に示すとおり、自分自身にとって学ぶべき内容としては、美術表現活動では「想像力を育め

るようになる」が最多であり、続いて「楽しませることができる」となり、「自己肯定感を感じさせられる」「連帯感を感じさせられる」は共に0名であった。音楽表現活動では「楽しませることができる」が最多であり、「想像力を育めるようになる」は1名、「自己肯定感を感じさせられる」「連帯感を感じさせられる」は共に0名であった。

自分自身の経験としては、授業を受ける中で楽しめたこと以外に連帯感や周囲から肯定されたことが良い思い出となっているが、入学時点では自分自身がそういった感情を子どもたちに与えることまでは思い至らず、「その他」としてまとめた知識・技術・指導方法等に必要性を感じていることが伺える。

Ⅲ 新設科目に求められる内容

Ⅲ-1. 『小学校学習指導要領』からみる美術表現科目と音楽表現科目との特徴について

第2章にて、学生は自分自身の経験から美術と音楽の授業に異なったイメージを抱いており、その原因はそれぞれの授業内容から来るものであることが予想されることを述べたが、その確認のため『小学校学習指導要領』の『図画工作』と『音楽』の相違点をみていきたい。

『小学校学習指導要領』⁵⁾にはそれぞれの科目につ

表Ⅱ-3 将来、保育者として子どもたちに指導するため、自分自身にとって学ぶ必要があると思う事について、美術表現活動と音楽表現活動との比較

	将来、保育者として子どもたちに指導するために、自分自身にとって学ぶ必要があると思う事（複数回答含む）	
	美術表現活動	音楽表現活動
楽しませることができるようになる	11 (12.8%)	14 (16.5%)
想像力（創造力、発想力等を含む）を育むことができるようになる	18 (20.9%)	1 (1.2%)
自己肯定感を感じさせることができるようになる	0 (0.0%)	0 (0.0%)
連帯感を感じさせることができるようになる	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他（知識・技術・指導方法 等）	58 (67.4%)	70 (82.4%)

いて目標が示されている。それらを比較すると、『図画工作』には「自分の感覚や行為を通して理解する」と自分自身の解釈に基づく理解が求められているが、『音楽』では「曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解する」と自分の感性に加えて歌詞の意味や音楽的理論からくる解釈が求められ、〔共通事項〕(1)のイにも「音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること。」と示されている。また、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』⁶⁾にて「歌唱や器楽、鑑賞の活動においては、取り扱う曲の曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解しながら、表現したり鑑賞したりすることが大切となる。」と解説されている。

次に「思考力、判断力、表現力等」に関する目標(2)では、『図画工作』には「創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりする」ことが求められているが、『音楽』では「音楽を味わって聴くことができる」となっており、「創造的に発想」「自分の見方や感じ方」といった内容は『図画工作』にのみ記載されている。しかしながら、『音楽』に自分の感じ方等が不要というわけではなく、例えば『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』にて「音楽表現を工夫するとは、歌唱や器楽の学習においては、曲の特徴にふさわしい音楽表現を試しながら考えたり、音楽づくりの学習においては、実際に音を出しながら音楽の全体のみならずなどを考えたりして、どのように表現するかについて思いや意図をもつことである。音楽を味わって聴くとは、音楽によって喚起された自己のイメージや感情を、曲想と音楽の構造との関わりなどと関連させて捉え直し、自分にとっての音楽のよさや面白さなどを見だし、曲全体を聴き深めていることである。音楽表現を工夫したり、音楽を聴いて自分にとっての音楽のよさなどを見だしたりするためには、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることが必要である。」と記されている。つまり目標(1)と同様、

自分の感性に加え、曲想と音楽の構造に基づいた音楽表現・鑑賞が必要であると言える。

共同活動については、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』にて、身に付ける技能として「互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」「互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」といった共同活動に関するものが多く挙げられ、「共に歌う楽しさを味わうようにする」「音を合わせて演奏する楽しさを味わうようにする」といったことが教師に求められている。しかし、『図画工作』については『小学校学習指導要領』第7節「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1の(5)に「第2の各学年の内容の「A 表現」の指導については、適宜共同して作り出す活動を取り上げるようにすること。」と示される程度である。さらに『中学校学習指導要領解説 美術編』⁷⁾では共同活動に対して「他者と学び合うこと」として「美術科の授業においては、生徒一人一人が個々に作品を制作したりするような個人による学習の形態をとる場合が多い。また、鑑賞の学習においても、個人で作品を鑑賞したり、教師とのやり取りだけの活動で終始したりすることも見受けられる。美術科の学習は一人一人が表現や鑑賞を通して、感性や想像力を働かせて、自分としての意味や価値をつくりだしていく。そこには、一人一人のよさや個性などがあり、それらは他者と交流し、認め合い尊重し合う活動をすることによってより高められていく。」との説明が記されている。

以上のことから、音楽表現活動は基本的には集団で行うもの、美術表現活動は基本的には個人で行うものといった認識が感じられる。

さらに、『小学校学習指導要領』音楽「3 内容の取扱い」には歌唱教材名が具体的に示されたり、〔第3学年及び第4学年〕ではハ長調の楽譜を見たりして歌ったり演奏する技能が、〔第5学年及び第6学年〕ではハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌ったり演奏する技能が身に付けるものとして挙げられているように、技能を身に付ける順序も示されている。しかしながら、図画工作にて具体的な名称が挙げられているのは「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」2の(6)の材料用具名のみであり、「小刀と定規を用いて直線を切れる」といった具体

的な技能や鑑賞すべき作品名といったものは挙げられていない。

こうした学習指導要領に示されている項目から、美術と音楽には同じ表現系科目でありながら次のようなそれぞれの特徴が伺える。

- 美術表現科目について
 - ◆著名な作品を模写・模造することはあまりない。
 - ◆自分の感性・感覚・発想等に基づき自由に表現・鑑賞する。
 - ◆創造性や独創性などを持った個人の作品が求められる。
 - ◆個人の経験や得意不得意が違うため技能の難易度を一般化できず、その修得する順番を示す事ができない。
 - ◆技能の不足を感性や発想で補いやすい。
 - ◆一部の鑑賞者参加型インスタレーション等を除き、制作する行為と鑑賞する行為とは分離しており、それぞれを同時に楽しむことは困難である。
- 音楽表現科目について
 - ◆著名な楽曲を歌ったり演奏したりする（特に集団で）。
 - ◆歌詞や作曲者の意図を読み取り、それに基づき表現する。
 - ◆創造性や独創性などを持った個人の作品として、作詞作曲することはあまりない。
 - ◆技能の難易度が一般化でき、その修得する順番を示す事ができる。
 - ◆一定の知識・技能が無ければ楽しみにくい。
 - ◆歌唱・演奏しながら同時にそれを楽しむことが可能である。

よって、学生の小学校教育の理解に資するためには各科目に応じたアプローチが必要であり、例えば具体的な曲名が示されている音楽においては幼稚園において歌唱する歌と小学校において歌唱する歌との関連を知ることにより意味があり、美術においては個性を認めそれぞれ感性に基づく表現方法で制作しても良いことを肯定する保育者の姿勢を涵養していくことに意味があると考えられる。

Ⅲ-2. 美術表現科目及び音楽表現科目に求められる内容

以上の分析を踏まえ、次のような内容を持つ新設科目開設を目指し、検討を続けていきたい。

- 共通する内容
 - ◆科目に苦手意識を持っている学生がそれを引きずることで将来表現活動を指導することに抵抗感を抱かせないように、表現活動における自己肯定感の涵養を行う。
 - ◆そのために表現活動に対する苦手意識を払拭し、生涯にわたって表現活動を楽しめる姿勢を身に付けさせる。
 - ◆教師や周囲に個性を否定されたことにより表現活動に嫌悪感を抱いた学生が一定数存在することから、保育者として子どもの個性を認める態度の涵養を行う。
 - ◆制作活動や演奏・歌唱活動を通して、幅広い専門的知識・技術に加えて、就職先から求められている計画性や自発的行動力を身に付けさせる。
- 美術表現科目の特性に応じた内容
 - ◆保育者として子どもたちの個性を認め、自らの思いに基づいた表現方法を肯定する態度を涵養する。
 - ◆個人の表現活動が主であり他者と関わる機会が少なくなりがちであること、協力し合うことで表現活動に積極的に参加できる傾向が見られることから、共同で行う制作課題も体験させる。
 - ◆小学校教育の理解に資する内容として、創作活動を楽しめる基礎として、自由に表現できる態度や感性を育める保育者の役割を理解させる。
- 音楽表現科目の特性に応じた内容
 - ◆保育者として子どもたちに音楽表現活動を楽しませたり、その中で連帯感を感じさせたりするために必要な知識・技術を修得させる。
 - ◆小学校教育の理解に資する内容として、学習指導要領に示されている技能や教材につながる基礎を育める保育者の役割を理解させる。

Ⅳ おわりに

『美術工芸Ⅰ』にて行ったアンケートの調査分析は昨年度の本学紀要に投稿したが、本稿では『音楽』にて行ったアンケート結果を比較できたことにより、学生がそれぞれの表現科目についてどう考えているのか把握できた。今後も意識調査を行い、より質の高い教職課程を編成することに寄与したいと考える。

謝 辞

アンケートに回答して下さった学生の皆様に深く感謝を申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 辻真樹, 2020, 幼稚園教諭養成課程における「専門的知識・技術」に関する一考察 -美術表現活動に関する学生の意識調査を中心として-, 香川短期大学紀要, 第49巻, pp193-209
- 2) 中央教育審議会, 平成27年12月21日, これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申), 文部科学省, p.32
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (参照 2021.11.27)
- 3) 文部科学省初等中等教育局長 高橋道和, 平成29年11月17日, 教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令の公布について(通知), 文部科学省
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1398706.htm (参照 2021.11.27)
- 4) 前掲2), p.16
- 5) 文部科学省, 平成29年3月, 小学校学習指導要領, 文部科学省, p.116
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf (参照 2021.11.27)
- 6) 文部科学省, 平成29年7月, 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編, 文部科学省, p.27

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf (参照 2021.11.27)

7) 文部科学省, 平成29年7月, 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編, 文部科学省, pp.133-134
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_007.pdf (参照 2021.11.27)

2021『美術工芸 I』のオリエンテーションでの意識調査

以下の質問に回答してください。

- 学籍番号
- 氏名
- これまで受けた美術の授業を振り返って、良い思い出はありますか？
 1. 良い思い出がある
 2. 良い思い出はない
- 上の質問で良い思い出があった場合、その思い出の内容を書いてください。
- 上の質問で良い思い出があった場合、良い思い出になった理由（なぜそれが良い思い出になったのか？）を書いてください。
- 上の質問で良い思い出がなかった場合、なぜ良い思い出がないのかを自分なりに分析して書いてください。
- これまで受けた美術の授業を振り返って、嫌な思い出はありますか？
 1. 嫌な思い出がある
 2. 嫌な思い出はない
- 上の質問で嫌な思い出があった場合、その思い出の内容を書いてください。
- 上の質問で嫌な思い出があった場合、嫌な思い出になった理由（なぜそれが嫌な思い出になったのか？）を書いてください。
- 上の質問で嫌な思い出がなかった場合、なぜ嫌な思い出がないのかを自分なりに分析して書いてください。

これまでの間を踏まえて、自分が将来保育者になった際、子ども達にどんな造形活動を体験させたいですか？

- 子ども達に体験させたい造形活動を書いてください。
- それを体験させたい理由を書いてください。
- それを通して何を感じさせたいかを書いてください。

本科目のオリエンテーションで履修者の到達目標を「小学校～高校までの美術の授業で学んだ美的なものへの愛好心・感性的なことに加えて、保育者として子どもたちに指導するための知識・技術を身につけ、活用できる」と説明しました。

- 入学前は、将来、自分が保育者として子どもたちに美術工芸（図画工作）的な内容を指導することを意識していましたか？
 1. 意識していた
 2. 入学前に保育施設で働いていたので知っていた
 3. 特に考えていなかった
 4. その他
- オリエンテーションの時点で「保育者として子どもたちに美術工芸（図画工作）的な内容を指導する自信」はありましたか？
 1. 非常に自信を持っている
 2. 少しは自信を持っている
 3. 特に自信も不安も感じない
 4. 少し不安を感じている
 5. 非常に不安を感じている
- 将来、保育者として子どもたちに美術工芸（図画工作）的な内容を指導するために、自分自身にとって、今後どのような学びが必要だと考えますか？。

2021『音楽』のオリエンテーションでの意識調査

以下の質問に回答してください。

- 学籍番号
- 氏名
- これまで受けた音楽の授業を振り返って、良い思い出はありますか？
 1. 良い思い出がある
 2. 良い思い出はない
- 上の質問で良い思い出があった場合、その思い出の内容を書いてください。
- 上の質問で良い思い出があった場合、良い思い出になった理由（なぜそれが良い思い出になったのか？）を書いてください。
- 上の質問で良い思い出がなかった場合、なぜ良い思い出がないのかを自分なりに分析して書いてください。
- これまで受けた音楽の授業を振り返って、嫌な思い出はありますか？
 1. 嫌な思い出がある
 2. 嫌な思い出はない
- 上の質問で嫌な思い出があった場合、その思い出の内容を書いてください。
- 上の質問で嫌な思い出があった場合、嫌な思い出になった理由（なぜそれが嫌な思い出になったのか？）を書いてください。
- 上の質問で嫌な思い出がなかった場合、なぜ嫌な思い出がないのかを自分なりに分析して書いてください。

これまでの間を踏まえて、自分が将来保育者になった際、子ども達にどんな音楽表現活動を体験させたいですか？

- 子ども達に体験させたい音楽表現活動を書いてください。
- それを体験させたい理由を書いてください。
- それを通して何を感じさせたいかを書いてください。

音楽を学ぶ意識について質問です。

- 入学前は、将来、自分が保育者として子どもたちに音楽表現的な内容を指導することを意識していましたか？
 1. 意識していた
 2. 入学前に保育施設で働いていたので知っていた
 3. 特に考えていなかった
 4. その他
- オリエンテーションの時点で「保育者として子どもたちに音楽表現的な内容を指導する自信」はありましたか？
 1. 非常に自信を持っている
 2. 少しは自信を持っている
 3. 特に自信も不安も感じない
 4. 少し不安を感じている
 5. 非常に不安を感じている
- 将来、保育者として子どもたちに音楽表現的な内容を指導するために、自分自身にとって、今後どのような学びが必要だと考えますか？。

